

CA1  
EA947  
B71  
#39 Nov. 1981  
DOCS



特集・カナダ大使館案内

1981年11月  
No. 39

ISSN 0389-1852

大 成

LIBRARY / 318-10116-1  
JAN 12 1982  
AFFAIRES EXTÉRIEURES  
LIBRARY / 318-10116-1



トピックス—— 2

新大使、抱負を語る—— 4

大使夫人の横顔—— 5

大使館各部案内—— 6


カナダ特派員日記⑥／子供歳時記・橋田忠明—— 14

カナダ研究の潮流(2)ー歴史学・デビッド・スミス—— 15

カナダ人の発明発見 (XIII) —— 16

編集後記—— 16

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

# TOPICS

## カナダの航空宇宙産業 売上げ高世界第五位に

カナダの航空宇宙産業は、昨年二十三億ドルをこえる売上げを記録し、米国、フランス、英国、ソ連に次ぐ世界第五位の実績を示した。

航空宇宙関係企業百十社からなる航空業協会のジャック・テロツシユ会長によると、売上げは一九八五年には現在の二倍となり、八〇年代の終りにはさらに倍増する見込みだという。

六月に開かれたバリ航空ショーには、カナダからスター・エアロスペース、リットン・システムズ、カナダ、デハビランド・エアクラフト・オブ・カナダ、カナデアなど、およそ三十社が参加し、大きな成果をあげた。

カナダの航空機メーカーのうち、特に業績が目覚ましいのは全売上げの約一割を占めるデハビランド社。同社はこれまでに短距離離着陸機の五十人乗りダツシユ7を百機以上も売却または受注しているが、一九八三年の中頃に初飛行が予定されているダツシユ8についてもすでに多くの引き合いがあるという。

スター・エアロスペース社は、

米国のスペース・シャトルの「腕」ともいえるべき遠隔操作システムを製作したことで知られる。

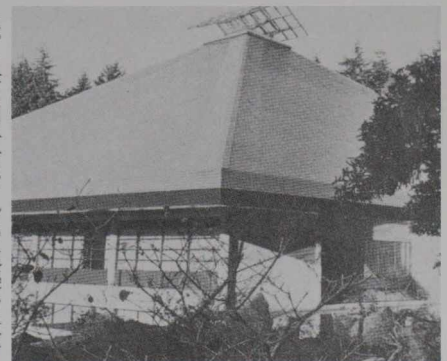
カナデア社のビジネス・ジェット機チヤレンジャーも好評で、これまでに十四機が発注者に引き渡されている。

## UBCにアジア・センター アジア学科、図書館などを収容

ブリテイッシュ・コロンビア大学(UBC)に今年の夏、アジア・センターが開設された。

センターの建物(地上二階、地下二階)には、同大学のアジア学科、アジア研究所、アジア図書館(蔵書二十五万冊)、それに音楽学科、芸術学科、演劇学科のアジア部門が入るほか、講堂、音楽スタジオ、展示室なども完備している。このセンターは、一般の人にも開放されている。

アジア・センターは、当初、ブリテイッシュ・コロンビア州の連邦加盟百周年(一九七一年)の記念に日本からBC州の州民への贈り物として構想された。建物の枠組みは三洋電機が大阪万博のときのサンヨー館の枠組みを寄贈し、バンクーバーの日系建築家トナルド・マツバ氏がこれを地下二階、地上二階、寄せ棟造りの建物に仕上げ



UBCに完成したアジア・センター

た。五百四十万ドルの建築費は、BC州政府、経団連、日本万国博覧会記念協会、カナダ連邦政府などが負担した。

## 連邦政府とアルバータ州 原油価格、収入配分で合意

カナダ連邦政府とアルバータ州政府は、九月一日、一九八六年末までの石油および天然ガスの基本価格を設定した協定覚書に調印した。

およそ一年半にわたる交渉が決着したことにより、停滞していた石油・天然ガス開発プロジェクトが再開され、日量十八万バレルも削減されていた石油生産も元に戻ることになった。

合意の内容は、要旨次の通り。

●アルバータ州における既開発通常原油(旧油)の井戸元価格を、現在(九月一日)のバレル当り十八ドル七十五セントから十月一日に二ドル五十セント、来年一

月一日と七月一日にそれぞれ二ドル二十五セント、その後は六か月ごとに四ドルづつ引き上げ、一九八六年七月一日には五十七ドル七十五セントとする。ただしこの時点の価格は、国際原油価格水準の七五パーセントを上回らないものとする。

●一九八〇年十二月三十一日以降に発見された通常原油、既存の油田からより高度の抽出技術を用いて得た追加生産分、オイルサンドおよびフロンティア油田から生産した原油——すなわち「新油」の価格は来年一月一日の予想価格バレル当り四十五ドル九十二セントから、六か月ごとに引き上げられ、一九八六年七月一日には約七十九ドル四十八セントとなる。価格は国際原油価格に準拠するが、それを上回らないようにする。

●天然ガスの価格(現在アルバータ州界渡して千立方フィート当りドル九十・五セント)は、来年二月一日に二十五セント、その後は半年ごとに二十五セントづつ引き上げられる。

●この協定による石油収入(見込み二千百十二億八千万ドルは、アルバータ州三〇・二パーセント、連邦政府二五・五パーセント、生産者四四・三パーセント)の割合で分配する。

## カナダ学会、札幌で年次大会

日本カナダ学会(会長・平野敬一 東大教授)の第六回年次研究大会が、九月五・六の両日、札幌の

北方圏センターと北海学園大学で開かれた。

この研究大会には、地元の北海道大学、北海学園大学、北海道教育大学、北海道庁をはじめ、日本各地の大学、それに在日もしくは訪日中のカナダの学者数人をいれて百二十余人が参加、熱心な議論を展開した。

## テリー・フォックス・マラソン 内外各地で百万人が参加

がんで右足を失ないながら、がん撲滅のための研究費を募金しようとして五千キロも走り続けたテリー・フォックスの献身的行為を記念して、九月十三日、「第一回テリー・フォックス・マラソン大会」がカナダおよび世界各地で開かれた。

主催者によると、カナダ全国八百か所以上で十キロ・レースが展開され、およそ百万人がマラソン、徒歩、スキップで、あるいは自転車やスケートに乗って参加した。また西独、スペイン、日本、中国、英国など、カナダの外交官や軍隊が駐在する世界各地でも、十キロ・マラソンが行われ、在任カナダ人を中心に多数が参加した。各地の走者の中には、テリー・フォックスのような身体障害者も混じっていたという。

このマラソン大会は、がん研究募金のためのもので、およそ三百五十万人が参加ランナーの。後援者。となり、合計五百万ドル以上の寄付を約束した。カナダでは走

者が家族や友人、あるいは団体などから献金の約束をとりつけて参加する、このような慈善マラソンがよく行われる。

### 八八年の冬期オリンピック開催地 カルガリー(アルバータ州)に決定

一九八八年の冬期オリンピック大会は、ロッキー山脈をのぞむ景勝地カルガリーで開催されること、国際オリンピック委員会総会で決まった。

カルガリーはアルバータ州(州都エドモントン)第二の都市で、人口約六十万。かつては農牧で発展した町だが、現在はカナダにおける石油産業の中心地として知られ、五百以上の石油企業がここに本社を構えている。住民は英国系、ドイツ系、ウクライナ系、フランス系と多様で、世界各地の文化が集まってコスモポリタンな雰囲気を出している。文化やスポーツ活動がきわめて盛んで、国際的なホッケー大会やフィギュアスケート大会も、何度かここで開かれた。

オリンピックのための施設も豊富だ。まず国際空港。カルガリー大学の近代的な寮を利用した選手村。医療クリニック、二つのプール、二つのアイス・リンク、サウナなどを揃えた室内訓練施設。開会式のためのスタジアム(三万四千席)。アイスホッケーとフィギュアスケート用のオリンピック・コロシアム(一万八千席、

来年末完成の予定)。スピードスケート競技場。さらに市の西側にあるブラッグ・クリーク・レクレーション・エリアにはクロスカントリー・スキーやバイアスロンのコースがあり、新しくジャンプ、ホプスレー、リュージュ用の施設も用意されることになっている。アルペン・スキートの競技は、ブラッグ・クリークに近いロッキー山脈のふもとに新設されるコースで行われる。

大会期間は二月二十三日から十三日間。



カルガリー市

### 日加の銀行が相互乗入れ ロイヤル銀行などが支店開設

カナダでは昨年末の銀行法改正に伴って外国銀行が現地法人として銀行業を営めるようになり、日本からはすでに東京銀行が百パーセント出資の「カナダ東京銀行」

トルドー首相と、レベック・ケベック州首相を除く九人の州首相は、十一月五日、憲法(英国領北アメリカ法)「BNA」のカナダ移管、憲法に明文化される修正方式および「権利・自由の憲章」の内容について合意した。

### 連邦と各州 “新憲法”問題で合意 制定へ大きな一歩

今年四月の州首相会議で決まったのとほぼ同じで、①すべての憲法修正は連邦議会の承認が必要②修正は原則として十州のうち全人口の過半数を占める七州の同意が必要③憲法修正がある州の権利、権限をトント(本店)とバンクローバー(支店)に設置し、預金・外為など全般的な銀行業務を行っている。

また、この改正によって日加間の銀行の相互乗入れが可能になったため、カナダのノバ・スコシア銀行、モントリオール銀行、カナダ・ロイヤル銀行も今年、東京に支店を開設し、業務を始めていく。

あるいは特典を減ずる場合、その州は州議会の過半数の承認を得てこれらの権利、権限、特典を保留することができ、④君主、議院構成、言語、最高裁の構成など、重要事項の修正は、すべての州議会の同意が必要、というもの。

「権利・自由の憲章」は、州内における少数派の言語教育権などについて連邦案を一部修正した上で合意にこぎつけた。

また、地域格差の是正や非再生天然資源の所属についても、憲法に明記されることになった。

この合意の結果、カナダは宿願の「自主憲法制定」へ大きく踏み出したことになる。「新憲法」は、最終的には連邦議会で承認の上、英国議会の議決をへて制定の運びとなる。

### 東京でカーリング大会

東京カーリング・クラブ(小松誠会長)では、十二月十二日から来年二月二十一日まで日比谷シテイスケートリンクでカーリングの会社対抗リーグ戦を行う。また、二月十三日、同クラブのチームのほか、北海道カーリング協会チーム、在日カナダ・チームなどによる国際カーリング大会を予定して

いる。東京カーリング・クラブでは、この大会に参加希望のチームは事務局(川崎市多摩区高石二番地ハイテンス一四小方、電話〇四四一九五四一六五〇五)に連絡するよう呼びかけている。

### 日加間の姉妹都市が二十組に 白老町、直島町、狩谷市など

日加関係の順調な発展を反映して、両国の姉妹都市が今年だけで六組ふえた。カナダと日本の姉妹都市は、これで合計二十組になる。

このほか、横浜港とバンクローバー港、あるいはロータリー・クラブや学校同士の提携もふえており、市民レベルの交流はますます活発化している。

今年姉妹都市になったのは、春日井市(愛知県)とケローナ(ブリティッシュ・コロンビア州)、能登川町(滋賀県)とテーバー(アルバータ州)、狩谷市(愛知県)とミシソガ(オンタリオ州)、白老町(北海道)とケネル(ブリティッシュ・コロンビア州)、直島町(香川県)とティミンズ(オンタリオ州)、それに交野市(大阪府)とカーリングウッド(オンタリオ州)。進出企業を通じて、同じ鉱業都市同士として、あるいは市民の訪問がきっかけとなって姉妹都市提携となったもので、それぞれ教育、文化、スポーツなどの分野で交流を進めることになっている。

# 新大使、抱負を語る

パリイ・ステイアズ氏が、十月二十六日、天皇陛下に信任状を奏呈、一九五二年に日加間の国交が再開されて以来第八代目の駐日大使として就任した。マルタ夫人と一緒に赴任である。ステイアズ大使は、駐ブラジル大使、駐ニューヨーク総領事などを歴任した通商・外交のベテランで、駐日大使に任命されるまでは通商産業省次官補の要職にあった。就任したばかりのステイアズ大使に、今後の日加関係に対する抱負などについて聞いてみた。聞き手は、日本経済新聞社の武田外報部長にお願いした。

武田 駐日大使への就任が決まったとき、まずどういうことをお考えになりましたか。

大使 とても嬉しかったですね。わが国にとって日本との関係はとても重要ですし、対外関係にかかわっている人間ならば誰だってそのことをよく知っています。非常にやりがいのある仕事ですから……。駐日大使の話があったときは本当に嬉しかったですね。

## ■順調な関係

武田 駐日大使としてやるべき一番重要なことは何だとお考えですか。

大使 日加両政府には、相互の関係を発展させるためにできるだけのことをやる、という共通の認識があります。相互の見解が似ているので、両者の間にはとりたてて大きな政治問題もありません。

世界に対する考え方も比較的よく似ています。ですから、経済関係の拡大にもっと時間をさくことができます。経済関係が強化されれば、他の分野にも大いに可能性がでてきます。もちろん、経済関係と政治その他の関係とは表裏一体です。政治関係は緊密ですが、それ以外に文化的、社会的な相互理解——国民相互間の理解——も必要です。民主主義国同士として、うまく理解し合えると信じています。

武田 現在の日加関係をどうご覧になりますか。

大使 過去十五年ぐらいの間に、カナダの対日貿易、日本の対加貿易は着実に伸びてきました。日本からの輸出品は、カナダ全国に行き渡っています。日本を優秀な製品の生産国、重要な技術製品の生産国と考える人は、カナダにはまずいませんね。日本製品を歓迎する人が多く、一方、日本も、小麦、キャノーラ（なたね）油、石炭、塩化カリ、パルプ、ツィバイフオー建築用材……と、西部カナダを中心にカナダから多くの商品を買っており、カナダにとって二番目に大きい貿易パートナーになっています。太平洋、大西洋両沿岸とも、漁場としてきわめて有望で、日本はいずれカナダの水産物の一大輸入国になるだろうと、カナダの業界では期待しています。

カナダはエネルギー資源も豊富です。ご存知のように、先進工業国としては唯一の資源輸出国です。わが国には一般炭、原料炭などいろいろな種類の石炭があり、日本からも大規模な引き合いをいただきます。

ています。日本は、中東全体と同量の石油を含んでいるといわれるわが国のオイルサンドの開発にも、またボーフォート海の石油・天然ガス開発にも参加しています。

## ■カナダは太平洋国家

対日関係の発展により、カナダは太平洋国家へと転換しました。これはわたしたちにとってきわめて重要な方向転換ですよ。米国はカナダにとって抜きんで重要な国です。この関係は今後とも変わらないうでしよう。その一方で、日本との強固な関係もわが国にとってとても大切です。

武田 カナダは対日貿易収支が黒字という、世界でも数少ない国のひとつですが、日本の自動車輸出問題などについては不満を表明しています。対日貿易が安定しているのに、どうして大騒ぎするのでしょうか。

大使 私は大騒ぎしているとは思いませんね。カナダの対日貿易が黒字だというのはその通りですが、重要な分野においては赤字だということも事実です。日本がカナダからもっと付加価値の高い製品を買ってくれば、（工業地域）中部カナダの日本に対する関心も高まるでしょう。日本が付加価値の高い製品の輸入を増やしてくれば、両国の貿易関係は一層高まるはずですよ。

武田 ところで、日加関係において貿易はもちろん非常に重要ですが、そのほかの、例えば文化や学術などの交流につ



ステイアズ新大使

いてはどういう風にお考えですか。

**大使** 近年、日本からカナダへ行く観光客の数は目ざましく増えてきました。

カナダから日本に来る観光客も増えていきます。今度来日する前にビクトリア（ブリティッシュ・コロンビア州の首都）にあるブッチャーズ・ガーデンに行きましたが、そこでは英語と日本語の両方が通用していました。パンフのみやげ品店やレストランでもそうですよ。日本からのお客さんは、年間十六万人にものぼっています。お互いの国を訪問することによって、わたしたちは相手の国や国民について理解を深め、互いに重要な関係にあることを認識します。ですから、国民同士の間にはもともと増えていいと思いますね。

また、大使館としては、マスコミを通じて、カナダをもっとよく理解してもらうようにしたいと思います。カナダのあるがままの姿を知ってもらうのは、とても大事ですからね。

**武田** 大使はこれまで本庁はもちろん世界各地に赴任されたわけですが、日本とは以前に何かかわりをお持ちでしたか。

**大使** 私は政府でエネルギー、穀物、金融、先進国首脳会議（サミット）などに関する背景説明文書の作成などを担当しましたので、そういう問題を通じて日本と関係がありましたね。小麦のことで来日したことがありますし、今年の六月にもラムリー貿易担当国務大臣に同行して来日しております。

**武田** 最後にご家族や趣味についてうかがいたいのですが……。

### ■ 楽しみな日本体験

**大使** 私の妻はもともと栄養士で、料理が大好きです。日本料理はとても洗練されていますし、ほかの国の料理とはずいぶん違いますので、これから非常に楽しみにしています。また妻も私も読書が好きで、いろいろな国に住むうちに特に歴史に興味をもつようになりました。現在のいろいろなできごとが過去からどういふふうに形成されてきたのか、それを知るのには非常に面白いですよ。日本の歴史に関する本も何冊か読みましたが、興味つきないですね。特に日本が、明治維新後、短期間に銀行、資本制度を整備したのには感心しました。ただ、日本語が読めないのが残念です。これまで赴任した国では、ポルトガル語、ギリシャ語などその地の言葉を覚えてきましたので、東京在任中に日本語ができれば、初めて赴任先の言葉が分らないということになります。趣味としては、あと水泳やボート、釣り、クロス・カントリー・スキー、庭の手入れなどですね。これまで私が赴任した中で、日本ほど洗練された国はありません。日本にいること自体が私や妻にとって全く新しい体験ですので、これから、いろいろ勉強していけるのが楽しみです。日本はある意味で将来を先取りしていますので、その点でも日本に赴任できてよかたと思います。

日本の料理や歴史にとっても興味……

## マルタ夫人の横顔

「本物のコロンビア産コーヒーの産地メデリンが私の故郷です。兄弟姉妹は全部で十四人、私は十番目」というマルタ夫人は、南米コロンビアの出身。高校を卒業してカナダのオンタリオ州ロンドンにあるウェスタン・オンタリオ大学に留学していたとき、同じ大学で政治経済学を勉強していたステイアズ氏に出会ったという。

一緒に卒業した翌年に結婚、三人の子供がいる。二十八才になる長男コーネル氏は、経営学を専攻して現在首都オタワにある貿易会社に勤務。長女のサラさんは、心理学を専攻、その後結婚して一児の母親である。もう一人の息子グレゴリー君は、現在大学二年生で、専攻はやはり経営学。三人とも、大学は両親と同じ



マルタ夫人

夫人は、大学で栄養学を勉強し、今でも料理が大好き。これまで夫君とともにニューヨーク、シンガポール、イスラエル、ギリシャ、ブラジルなどに滞在している間に料理の本を集め、それが百五十冊ほどになった。滞在先では、その土地の料理を好んで食べた。

「日本に来てから日本料理をよく食べていますが、主人も私もとても好きです。二人とも、どちらかといえば肉より魚や野菜が好きなので、日本料理は非常に気に入っています。日本料理の本も早く揃えて、勉強したい」と夫人は目を輝やかせる。いかにも気さくな感じだ。

マルタ夫人のもう一つの趣味は読書。これまでの任地では、早速言葉を覚えて、その地の新聞、雑誌、本、それに「看板でも何でも」読むのが楽しみだった。とにかく読むのが好きなのだ。

「日本語が読めないのが残念です。早く読めるように、これから一生懸命勉強します」

中でも好きなのは歴史。できればどこかの大学で日本史の講義を受けたい。

「日本はとても素晴らしい文化をもち、また豊かな歴史をもっているのです。日本についていろいろ勉強できるのが大変楽しみです。日本料理を習い、習字も勉強したい……」マルタ夫人は意欲満々だ。

ウェスタン・オンタリオ大学である。今年の冬、子供たちが訪ねてくる予定で、それが待ち遠しい。



# カナダ大使館案内

東京・青山の一角に構えるカナダ大使館。道ひとつへだてて東宮御所があり、官庁街の霞が関は目と鼻の先だ。日加間の外交関係が正式に樹立された一九二九年以来、カナダ政府はここを中心に日本と外交業務や商務活動などを続けしてきた。以来五十年余の日加関係の拡大・緊密化を反映して、大使館の業務は大幅に広がり、それとともにスタッフの数も総勢百数十人に増えた。そこでスナイアズ新大使の着任を機会に、当大使館の各部門の業務活動とそれぞれの担当者を紹介することにした。カナダ大使館にご用のある方は、ぜひご参考にしていただきたい。またさまざまな分野における大使館の活動を通じて、日加関係への理解も深めていただきたい。大使館だけでなく、州政府東京事務所も紹介した。なお、ここで取り上げたのは、外部とかわり多くの部門と担当者だけであって、大使館業務を支えているのはそれだけでないのほもちろんである。秘書、翻訳官、補綴係、運転手、資料係、電話交換手、郵便係、経理、総務・人事担当、守衛、テレックス・オペレーターなど、すべて欠かせない存在だ。

## アライズン大使



カナダと日本は、重要な貿易相手国同士として、またサミット(先進国首脳会議)に参加する西側先進工業国同士として、

最近一層絆を強めてきた。相互の関係が深まるにつれ、駐日大使館の役割や業務も拡大し、職員の数もカナダの在外公館の中では最大規模に入る。ジョン・アライズン大使は、こうした中で、政治、領事、総務、広報、防衛、移住といった分野を統括している。

## テイラー大使



大使館の経済関係すべてを統括しているのが、ジム・テイラー大使(経済・商務担当)である。商務部の活動の重要性から見て公使の統轄任務の中心部分は、商務計画ならびに政策目標にある。

公使はまず高官レベルの政府協議に参加し、またキャブレットウヅ炬の輸出促進や日本向け石炭の新規炭鉱開発プロジェクト

## 商務部

など、カナダにとって特に重要な大型プロジェクトをめぐる協議にも関係している。

カナダと日本の経済関係はますます緊密化し、日本はカナダにとって米国に次ぐ第二の貿易相手国となった。両国は日加経済協力大綱などの取り決めや経済合同委員会、民間の経済人会議などを通じ、一層協力態勢を強めている。

こうした経済関係を推進しているのが商務部。日本市場へのカナダの輸出を促進し、両国の通商関係を一層発展させるのが主な任務である。

従来から行っている商務部の主な仕事は、カナダの輸出入業者から引合いがあった場合に日本の輸入業者を斡旋したり、また逆に日本の輸入業者の間合わせに思ひ、カナダの輸出入業者を紹介することが中心。そのほか輸出機会の探求、競争力の評価、代理店の斡旋、支払条件についてのアドバイス、関税、阿克苏の問題などについてテイク全般にわたって、カナダの製造業者の相談に応じることも重要な仕事である。

商務部はさらに、ライセンズ提携、合併事業、産業投資などを通じて、カナダへの工業技術の導入を奨励し、同時に、技術輸出や日本での合併事業を希望する

カナダ企業に、適当な日本企業を紹介している。

### 商務一般担当



R. A. フェアウェザー参事官  
● 商務部実務統轄 ● 経済開発 ● 貿易政策



J. R. ブロックバンク参事官  
● 経済開発 ● 貿易政策 ● 事業投資 ● 合併事業 ● 技術提携



清原史朗商務官  
● 公使補佐 ● Candu型原子炉 ● 石油化学



矢部庸治参事官  
● 広報 ● トレード・センター ● 産業開発 ● 事業投資 ● 合併事業 ● 技術提携

なく、優先順位の設定も行わなければならない。この十月末に、前任者のテナント氏に代わって、かつて当大使館の商務官を務めたこともあるフェアウェザー氏が着任した。

首席商務参事官に直属して働くのが、三人の商務担当官。商務部の他のセクションが特定産業、特定製品の輸出促進を担当するのに対して、この三人は一般的な通商計画の遂行を任務とする。

首席商務参事官や公使（経済・商務担当）が活動の優先順位をつけられるように日加貿易の統計を作成したり分析する。カナダへの投資に関心のある日本人の企業にカナダの経済環境について情報を提供し、また対日輸出上の障壁あるいは問題について情報を集め解決の道を探るのも仕事。

カナダから来日する企業の中には、個別商品の売り込み以外の目的で来る人びともたくさんいる。技術ライセンスを売りたい、フランチャイズ・チェーンを共同で設立したい、あるいは輸送サービスの利用促進をはかりたい——こうしたいわゆる「見えざる」輸出（貿易外取引）の目的で来日するカナダ企業を手助けするのも、担当者の役目だ。

日本はカナダにとって第二の輸出相手国であり、政府高官の訪日ミッションも多い。それら使節団の日程を組み、時にはスピーチ原稿や記者会見の資料を作成するのも、この仕事である。

具体的な例で紹介しよう。日加間に調印された政府調達に関する合意によって、カナダの輸出業者も日本政府の入札に参加する機会を認められるようになったが、当セクションではカナダ企業や商務部内の他のセクションに、どんな機会が与えられているかを説明し、その規則や手続

きを研究して個々の製品担当部門に紹介するということもやっている。

### 高度技術製品担当



L. J. W. ダフィールド参事官 ● 電気・電子機器 ● 輸送機器（航空宇宙機器・自動車・自動車部品） ● 防衛関連機器 ● 公害対策機器



山岡良平商務官 ● 航空・宇宙・防衛産業 ● 自動車産業



樋口備商務官 ● 電気・電子機器 ● 海洋開発機器 ● 輸送機器（鉄道・船舶）

高度技術製品を中心とした各種工業製品の輸出促進が任務。

エレクトロニクス、航空宇宙機器、自動車（部品）などは、カナダ

が近年その育成に力をつ注いできた分野で、世界的に誇りうる製品もたくさん生まれている。だが日本ではカナダの高度技術製品が十分知られていない状態にあるとはいえず、

それだけこの面での担当者の任務も大きい。航空、防衛関係ではヘリコプター着艦装置、レーダーなどすでに長い取引関係があるものも少なからずあり、民間用の最新型ジェットエンジン、慣性航法装置も最近伸びている。当セクションでは日本の関係業界への情報・資料提供や日加両業界の連携をサポートするなど、両国企業

間の潤滑油としての仕事が多い。自動車関係では組み付け部品の対日輸出が最近とくに活発。

電気・電子機器ではTV部品とICの比重が大きい。カナダはテレビ関税払い戻し制度によって日本のメーカーがカナダに再投資することを奨励しており、すでに大手三社がカナダにTVの部品工場や組み立て工場を設置した。こうした形の日加提携の推進もこのセクションの重要な仕事だ。電子機器類ではこれまでにカナダ企業四十社が代理店を設置済み、輸送機器（鉄道・船舶）の分野では、

日本もカナダも海運国であり、海運・造船業界の協力関係が進んでいる。今年、バンクーバー港の近代化を図るためにカナダから視察団が来日し、横浜港の港湾施設を視察した（後日、両港は姉妹港となった）。日本の国鉄とカナダとのリニアモーターカーをめぐる技術協力（情報交換や部品の相互提供）にも大使館は関与している。海洋開発機器、輸送機器はエネルギー・セクションのカンキ商務官も担当。

### 農水畜産・食品担当

カナダの畜・水産物は、環境の良さ、広さを十分に生かした経営法によって良質の産物が多い。繁殖用の生体動物ではカナダが日本市場で圧倒的に強く、豚肉でもカナダは日本の三大輸入先の一つ。現在のところシエアの低い牛肉や鶏肉は、日本の消費



松水 宏  
● 食品  
● 商務官



鍵 謙  
● 穀物  
● 油糧  
● 商務官



松浦 昭一  
● 畜産  
● 水産  
● 商務官



J. J. ガードナー  
● 穀物  
● 油糧  
● 記官  
● ナー2等



D. G. マクニコル  
● 農水産統轄  
● 加工食品  
● 参事官

ための情報提供や説得に力を入れている。

カナダが豊かな農産国であることは、言うまでもない。対日輸出品目の筆頭は穀類。中でも小麦・大麦は日本の三大輸入先に入る。今後の有望品目は油糧作物(なたね)。カナダのなたね(キャノーラ)は在来種とは違う独自の改良品種だ。健康に良い低エルシン酸のキャノーラ・オイル、家畜飼料に好適なキャノーラ・ミールとして市場で注目されている。商務部では日加

者の嗜好が多様化してくるにつれて伸びが期待され、担当者としてもその辺の動向把握に努力している。嗜好の問題は、水産物に典型的に表われる。カナダ産の数の子、紅ザケ、シヤモ、淡水ワカサギなどは日本ですでにおなじみだが、冷凍技術の進んだカナダの生鮮魚を日本の消費者にもっとたくさん食べてもらうには日本人の嗜好に合わせたカナダ側の努力が大切。担当者もカナダの業者や政府を啓蒙する

なたね粕シンポジウムや食用油の共同キャンペーンを実施(日本油脂協会と共催)している。飼料原料(ふすま、アルファルファ等)、乾燥豆類、ピートモス(理想的な土壌改良剤)なども主な取扱品目。家畜飼料として大きな伸びが期待されるアルファルファについても、今年五月に初めて技術セミナーを企画、実行した。カナダは農産物の品種改良や用途に関する基礎研究の蓄積が厚く、この面での情報提供や技術交流の仕事が多い。当セクションでは日本農業と摩擦のない形での輸出促進を追求してきた。その典型的な成功例がからし、玄そば、キャノーラで、カナダ側へのこうした適切な助言も大事な仕事だ。

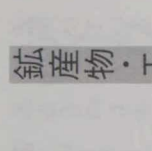
食品関係では、日本の消費者のカナダ製品に対する理解は、まだまだの状態にある。たとえばカナダにはスパゲッティやワインの非常にいいものがあるが、日本でそれを知っている人は少ない。そのほかハチミツ、果実加工品(とくにベリージャム)などもカナダが誇りうる食品だ。そこで当セクションとしてはこうしたカナダ食品の宣伝が一大任務となってくる。有名デパート等でのカナダ食品フェア、有名ホテルのレストラン・ショーのお世話を積極的にやっている。来年三月の東京晴海の国際食品展にも初参加する予定。カナダ産食品の輸出振興には、両国の食品衛生法規の違いが一つのネックとなっており、このため担当者は日本の関係法規に関する資料を作成するなど、カナダ側の理解を深める努力を続けている。



B. C. カン  
● 石油  
● 天然ガス  
● 海洋開発機器  
● 輸送機器  
● 1等書記官



T. D. マギ  
● 金鋼  
● 鉱産物  
● 石油  
● 資源  
● 以外の工  
● ネルギー



福田 誠一  
● 鉱産物  
● エネルギー  
● 資源  
● 商務官

相次ぐミッションのお手伝いで忙しい。そのほか、エネルギー・鉱産物の対日輸出促進、日本企業の対加投資あるいはカナダにおける合弁事業の促進、日本の産業

### 鉱産物・エネルギー担当

金属、鉱物、エネルギー資源は、カナダの対日輸出総額の半分以上を占める。カナダは日本にとって重要な天然資源供給国なのだ。当然、業者や政府関係者の相互訪問もひんばんで、このセクションは、こうした相次ぐミッションのお手伝いで忙しい。そのほか、エネルギー・鉱産物の対日輸出促進、日本企業の対加投資あるいはカナダにおける合弁事業の促進、日本の産業

### カナダ・トレード・センター

カナダ・トレード・センターは、駐日カナダ大使館によって企画、運営され、優れた品質と国際競争力を持つカナダの製品を、種々の専門展示会を通して日本の業界に紹介するために、一九七九年一月に設立された。場所は、東京・池袋のサンシャイン・シティ内ワールド・インポート・マート七階。

これまで三十二回にわたって各種展示

会が開催され、二百以上のカナダ企業が参加し、八千人近くの日本の業界関係者を迎えている。成立した商談も多い。展示会場にはカナダの出展企業の代表が控えており、来場者からの質問や商談に応じている。

- 現在、次の展示会が予定されている。
- 一月十九-二十一日 スポーツウエア、スポーツ用品展
- 二月十二-十四日 ハイ・テクノロジー展
- 三月二-五日 コンビエータ・通信機器展

エネルギー資源や鉱産物は、伝統的にカナダの重要な対日輸出品であるが、最近日本の鉄鋼業界がブリテイッシュ・コロンビア州北東部から原料炭を開発輸出する基本契約を結んだほか、北極石油(株)がボート海での石油・天然ガス開発に参加することになり、また中部、九州、中国の各電力会社と大阪、東邦両ガス会社がカナダから大量の液化天然ガスを二十年にわたって購入する契約を結んだことにより、日本に対する地下資源供給地としてのカナダの重要性はさらに高まった。日本はまた、将来が期待されているオイルサンドの開発にも参加してい

界に対するカナダのエネルギー政策、鉱産物政策の説明、日本のエネルギー事情に関するカナダ政府への報告が、主な任務。



る。

カナダ最大の対日輸出品目である石炭（昨年の輸出額五億八千九百万ドル）や初めて日本に輸出されることになったLNG以外に、銅（昨年の対日輸出額三億五千四百万ドル）、アルミニウム、ニッケル、亜鉛、鉛、モリブデン、塩化カリなども重要な対日輸出品で、これらも当セクションの担当。

また石油化学の分野でも、日加間のつながりが急速に強まりつつある。日本は石油化学製品を高価な石油を精製して作り出しているが、カナダが豊富な天然ガスから加工したエチレン誘導品などを購入して使えばずっと安くつく。カナダにとっては市場の確保、資源の付加価値の向上、日本にとっては安定供給源の確保となり、今後の発展が有望視されている。石油化学の担当はカンキ一等書記官（兼務）と清原商務官（兼務）。

### 林産・機械・第三国プロジェクト担当



G.スコット2等書記官  
●林産製品 ●建材 ●一般機械 ●第三国プロジェクト

カナダの対日輸出総額四十三億ドル（一九八〇年）のうち、林産品は約十一億ドルで、全体の約四分の一を占める。



矢崎安弘商務官 ●森林資源 ●紙・パルプ ●建築資材 (2×4工法) ●第三国プロジェクト

このセクションで扱っている林産品は木材、ハウジング（2×4関係）、

建材、チップ、紙パルプの五分野。

ハウジング分野は日加協力関係の成功例の一つによくあげられるが、当セクションも2×4（ツーバイフォー）の普及には長年の間、尽力してきた。一九七四年には2×4工法が建設省によってオープン化され、また2×4製材も農林規格で公認された。今日では日加住宅委員会が設置されて、政府レベルで情報交換を行っているし、BC州林産審議会東京事務所でも2×4工法の技術セミナーを業界向けに開いたりしている。

以上のほかに、窓枠、ドアなどの木製品の輸出も今後力を入れていきたい分野。一般機械関係では林業、建設、包装機械がこれまでに輸出されている。

今後進展を期待しているのが、第三国向けの共同プロジェクト。まだ実績は多くないが、当セクションでは東南アジア、中東などにおける日加双方の企業間協力の可能性を探っている。

### 一般消費財・広報・トレードセンター担当

カナダの消費財は、洗練されたセンスをもち、一つ一つ丹念に仕上げられた物が多いことはよく知られている。消費財担当は、食品以外の一般消費財の輸出振興を目的としたさまざまな仕事を手がける。

扱っている製品の三本柱は繊維製品（毛皮等）、スポーツ用品（スポーツウェアを含む）、医薬品・医療機器。ファッション性とクラフトマンシップが特徴の繊維製品は、毛皮だけでも一般消費財の



M.ヒューバー1等書記官  
●一般消費財 ●広報 ●トレード・センター統轄



大橋康一郎商務官  
●一般消費財

対日輸出の四分の一を占めて比較的稳定した関係ができています。このセクションが力を入れようとしているのは、カナダにすぐれた製品がありながら、日本には紹介の遅れている医療関係だ。医薬品はインシュリン

や動物医薬品などが原料として輸出されており、代理店数社の設定にも成功している。医療機器は放射線関係などに世界的に認められている有力メーカーがあり、今後その紹介に大いに力を入れる方針。手初めとして今年十一月にカナダ・トレード・センターで医薬品・医療機器の展示会を日本で初めて開いた。

三本柱のほかにインテリア、宝飾品、ギフト商品、日用大工品、キッチンウェアなどにすぐれたものがある。今後はカナダが得意とする製品分野で技術ライゼンスや合弁事業の推進も考えている。

カナダ・トレード・センターで行う展示会の企画・運営はこのセクションの仕事の大きな比重を占める。展示内容は海洋開発機器、電子・通信機器などのハイ・テクノロジー製品から毛皮、宝飾、などの一般消費財や食品にいたる輸出可能性の強い分野全般。毎回の展示会には、もちろん各分野の製品担当者が協力する。現在までのところ業界を対象とする専門

展示会だが、将来はカナダの文化や国民生活などを一般の人に紹介する催しも考えている。

商務部関係の広報資料、技術資料全般を作成することも、主要任務の一つ。定期刊行は季刊の「カナダ通商ニュース」（発行部数約二万部）。毎月カナダ産業の重要テーマを中心に、さまざまな分野の新製品をカラー写真とともに紹介した産業情報誌で、カナダ企業の代理店募集記事なども載る。そのほか各分野の担当者の協力の下にテーマ別のパンフレットや資料を作成する。

広報とカナダ・トレード・センターは、商務一般の矢部商務官がヒューバー一等書記官と一緒に担当している。

### カナダ原子力公社駐日代表事務所



Dr. W. R. トーマス  
駐日代表

カナダの発電用原子炉 CANDU（キヤンドウ）炉は、稼働率の高さ、燃料コストの安さ、安全性などで国際的に高い評価を得ているが、これを開発したのがカナダ原子力公社。CANDU炉のマーケティングも担当している。

駐日代表の仕事は、日本政府の原子力関係諸機関、電力会社、あるいは産業団体などにCANDU炉についての技術的な説明を行ったり、情報を提供することにある。また、日本の原子力の最新情報についてカナダの関係機関に情報を送ることも、仕事の一つだ。

## 経 済 部

カナダに影響のある、あるいはカナダ

の政策に重要な意味合いをもつ日本および国際経済の動向を調べるのが主な仕事。同時に、カナダ経済の動きについて、日本の政府担当者や企業に情報を提供する。具体的な担当分野は、銀行、国際金融、エネルギー、南北問題、二国間および多国間貿易政策問題、漁業、輸送など。



R. グラウリー 1等書記官  
●経済担当



D. ライト 参事官  
●経済担当



岩田昌典 次  
●経済調査官



K. ルイス 2等書記官  
●経済担当

## 政 治 部

カナダと日本の政治関係はきわめて良

好で、首相はじめ閣僚同士が相次いで相互訪問しているほか、日加外相定期協議など、さまざまな二国間会議や多国間会議でひんぱんに意見の交換・調整を行っている。両国とも先進国首脳会議（経済サミット）のメンバーで、今年七月にはオタワで第七回サミットが開催された。



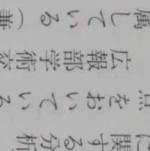
D. G. ロンク ミュア 参事官  
●政治担当  
協会」が組織されて



D. キレット 1等書記官  
●政治担当



A. ジョーンズ 2等書記官  
●政治担当  
および日本の主要諸国



岩田昌典 次  
●経済調査官  
点をおいている。



R. E. ジョー 海軍大佐  
大使館付武官  
議にあたるほか、カナ

いる。

政治部は、カナダの政策策定に重要な政治性をもつた日本の外交および国内政策の傾向を分析、評価し、カナダ政府に報告するのが仕事。

特に、両国の大臣や担当官同士の協議および日本の主要諸国との関係、国内の政界の動向、労使関係に関する分析、国会議員同士の交流に重点をおいている。

## 防 衛 関 係 担 当

日本の防衛庁およ

日本の科学技術の

動向についてカナダ政府に報告し、また科学技術の面で日加セクションの主な仕事である。

カナダは、その豊富な天然資源と広大な国土を開発する中から、さまざまな科学技術を発展させた。これまでカナダが特に力を入れてきた研究開発プロジェクトは食糧増産の分野。おかげでカナダは世界でも有数の穀倉地帯になっている。

そのほか、鉱産物の探査・採掘、水力発電、原子力発電（天然ウランと重水を使うキヤンプトウ型原子炉は、現在オンタリオ州で七基が稼働中、同州など三州であと十二基が建設中）、宇宙衛星（カナダは世界初の国内用通信衛星を含む八個の衛星を打ち上げている）、スペース・シャトル用遠隔操作システムに見られるような宇宙科学・工学、双方向テレビ報システム（テリドン）、光通信、短距離離着陸機などの分野で、世界的に優秀な技術を誇っている。

ここ数年、科学技術の分野で日加間の



J. コックフル 参事官  
●科学技術担当



田中誠一  
●科学技術調査官

協力の可能性が高まってきた。一九七五年に日本学術振興会とカナダ国立科学研究所（NRC）との間で科学情報と人的交流を促進・奨励するための協定が締結されたほか、一九七三年以来、科学技術に関する二国間協議が定期的に関われ、また宇宙、通信、海洋構造物、水産養殖、輸送、氷海技術などに関する使節団も相互に訪問している。

## 領 事 部

在日カナダ人および旅行中のカナダ人

に対する領事業務が主な仕事。パスポート（身分証明書）の発行・更新、国外で生まれたカナダ人の市民権取得の受け付け、審査、カナダ市民の保護、登録、公証の代理業務、カナダ人代理業務、カナダ



R. P. アーシェンホル 1等書記官  
●領事



G. C. フォーリー 2等書記官  
●領事



D. W. ウィットニー 3等書記官  
●副領事

儀典業務も、領事部の任務である。



中元 幸 官  
●領事



浦上 鈴子  
●公証人代理

## 部

# 広報・文化部



B.バーネット1等書記官  
●広報・文化統轄

日本人にカナダをよりよく理解してもらうため、大使館では広報・文化部を通じてさまざまな活動を行っている。広報・文化部は、およそ次の分野に分かれている。

## 出版物・マスメディア担当



吉田健正広報官 ●出版物・マスメディア担当

広報・文化部では、広報紙『カナダ』をはじめ、カナダの政治、経済、あるいはそれぞれの州に関する『背景説明』、『近代カナダの歩み』、『今日の世界におけるカナダ』といった小冊子を発行し、企業、団体、個人、図書館などに配布している。

マスメディアに対する大使館のいわば窓口で、報道資料の準備・配布、インタビューや記者会見の設定、マスコミとの対応、カナダ取材のお手伝いに当る。

## 情報・渉外担当



多田広蔵広報官 ●渉外担当

カナダと日本との姉妹都市や友好団体と協力して、日加間における国民レベルの交流を図り、日本におけるカナダ理解を推進するのが主な

仕事。

またカナダ紹介のための催し物を計画準備し、地方公共団体や民間のグループから寄せられる、カナダ視察旅行やカナダの諸団体・組織などに関する問合わせに応じている。



山田栄一 ●一般的問合わせ ●留学相談

一般の方々からも、カナダの地理や政治経済、社会、あるいは時事的なできごとなどについて、電話や手紙、または面会による問合わせや資料請求が多い。広報・文化部では、こうした問合せのほか、留学相談などにも応じている。

## 文化・学術担当

カナダと日本は、一九七六年十月、文化協定を結び、これまでの文化・学術関



L.アメル2等書記官 ●文化担当

の日本公演をバックアップするほか、芸術家や美術館同士の交流および情報交換などを通じて、できるだけカナダの文化を日本に紹介するよう努めている。



縄田明子広報官 ●文化・フィルム担当

一九七六年に初めてカナダ研究講座担当教授がカナダ政府から派遣され、また日本カナダ学会が発足したのを契機に、カナダ講座をもつ大学が増え、研究者の層も厚くなった。

係をさらに発展させることになった。

広報・文化部では、絵画展、映画祭、カナダ人演奏グループ

を日本に紹介するよう努めている。

学術分野における日加交流は、ここ数年、急速に活発化した。

カナダ政府は、日本から毎年八人前後



渡辺高雄広報官 ●学術交流担当

の大学教師を短期間カナダに招へいして日本におけるカナダ研究の充実・発展を図っているほか、毎年十数人の日本の学生・研究者に奨学金を提供している。

## 図書室担当



小松 博 ●図書・フィルム係

応じている。

図書室の図書および十六ミリ映画を管理し、貸し出しを行う。図書に関する一般の問い合わせにも

## 図書室

図書室は大使館の別館一階にあり、カナダの歴史、地理、経済、文学など、さまざまな分野の一般図書、参考図書約三千冊のほか、カナダの主要な新聞、雑誌、主な大学の入学案内、主要都市の電話帳、カナダに関する日本語図書、それに十六ミリ映画を揃えており、大使館職員だけでなく、一般の利用者にも開放している。開館は午前九時から午後五時半まで（十二時半から一時半までの昼食時間を除く）。利用法は次の通り。

図書 利用者は来館して登録の上、借



りる本を申し込む。一般図書に限り、二週間の期限で五冊まで貸し出している。十六ミリ映画 登録の上、図書室で映画カタログを参照して借りる映画を申し込む。カタログは希望者には無料で送付している。郵便による貸し出しも可。

## カナダ講座担当客員教授



D.スミス カナダ講座担当教授

日本におけるカナダ研究の充実を図るため、カナダ外務省は一九七六年以来、カナダ講座担当客員教授を日本に派遣している。筑波大学を中心に、慶応大学、東京大学、国際基督教大学などで、カナダ講座を担当するほか、その他の大学でも依頼に応じて特別講義を開いたり、研究会に参加したりする。これまで、歴史学、地理学、政治学など、異なる分野から五人の教授が派遣されている。

# 査証部



C. アダムズ参事官  
●移住担当



P. A. リリアス2等  
書記官 ●移住担当



永野一郎 イミグレーション・プログラマー・オフィサー

日加交流の進展を反映して、日本からカナダへ渡航する人の数は年々増えている。査証部では移住、就労、留学などのために渡航を希望する人や、観光でカナダを訪れる在日外国人のビザ申請を取り扱っている。

部内の仕事は大きく分けて、移住希望者の審査・ビザ発給

と、一時滞在者の渡航事務の二分野がある。

移住に関する事務は、査証部の最も重要な仕事のひとつだ。カナダへの移住は、この三年間、増加の一途をたどり、今年は千人近くに達するだろうと予測されている。とくにカナダで小規模の事業経営を始めるための移住者が多く、これは企業移民を優遇するというカナダ政府の方針とも合致するために、査証部では、企業移民希望者に対して情報の提供や相談に応じるなど、いろいろな便宜を図っている。

日加間には現在、ビザ協定が結ばれており、三か月以内の観光ならビザを必要

としない。技術者や研究者など、カナダで一定の職につく人に対しては、本国または東京の査証部で審査の上、就労許可証を発行している(年間千人前後)。また若い人々の間にカナダ留学熱が高まるにつれて、就学許可証の事務も増えてきた。

カナダとの間にビザ協定を結んでいない国の国籍をもつ在日外国人の観光ビザ申請も最近増えつつある。

# 関税・消費税局

物や人が日本からカナダに入ってくる際に、それに適用される関税上の規則や手続きについて、違反のないように日本人々にあらかじめよく知ってもらおうのが主な任務である。日本の企業や貿易団

体、政府機関などからの問い合わせに際したり、あるいは一般旅行者からの質問



箱田善哉  
関税アナリスト



中井正男  
関税アナリスト

に依るなどして、カナダの関税規則をめぐる両国の関係を円滑にし、通商関係

# カナダ政府観光局

広大でバラエティに富む国土と美しい自然に魅かれて、日本からカナダを訪れる人々は年々ふえている。観光、スキー、釣り、商務と、目的はさまざまだが、昨年だけでおよそ十六万三千人がカナダへ旅行した。



D. M. マルサン  
所長



D. J. キャメロン  
副所長



鈴木富雄 トラベル・プロモーション・オフィサー



横山 修 トラベル・プロモーション・オフィサー

カナダ政府観光局東京事務所は、一九六六年に設置されて以来、日本からの観光客誘致を進めてきた。新聞、雑誌やテレビによる広告キャンペーン、マスコミ関係者に直接カナダの良さを確かめてもらう招待旅行計画、業界のツアー企画者に新しいバック・ツァーを開発してもらったためのテスト・ツァー、一般の人々を



齋藤 純  
観光情報担当官



西尾理英子 (出向)  
●PR担当

者などからの問い合わせや相談に快く応じている。

を進展させ、あるいは観光をさかんにし、ひいてはカナダの産業発展を促進するのがねらいである。

関税・消費税局には、カナダの加工業者や製造業者を海外製品との不公正な競争から守るという任務もある。



カナダの見所を紹介した映画、写真、ポスターもたくさん制作しており、旅行代理店や関係者向けに無料で提供あるいは貸し出している。

# 州政府東京事務所

## アルバータ州



アイヴァン・ハムステッド  
所長

アルバータ州が東京に事務所を開設したのは十一年前。当初の目的は農産物と天然資源の対日輸出および観光の振興を図ることにあった。しかし、一九七九年、同事務所の活動範囲は大幅に拡大された。

アルバータ州の対日貿易は、エネルギー資源(特に原料炭と一般炭)と食糧(小麦、なたね、大麦、豚肉、牛肉、ハチミツ、ビートモスなど)を中心にきわめて活発。アルバータ州はまた、豊富な天然ガスを利用して世界的規模の石油化学産業を急速に発展させつつあり、その面での日本との提携も深まってきた。東京事務所では、こうした経済関係の促進に特に力をいれてきた。

観光客の誘致にも熱心だ。一九八二年には世界ボーイスカウト・ジャンボリー、

## カナダ大使館

東京都港区赤坂7丁目3-38

電話(03)408-2101

### 査証部

東京都港区赤坂8丁目5-25

電話(03)403-9176/8

### 観光局

東京都港区赤坂8丁目5-32  
山勝ビル5階

電話(03)479-5851/4

### 関税・消費税局

東京都渋谷区広尾2丁目2-16

メゾン・ジュエ

電話(03)400-7137/8

### 科学技術部

東京都港区赤坂8丁目5-32

山勝ビル5階

電話(03)479-5855/5754

## 州政府事務所

### アルバータ州

東京都港区南青山1丁目1-1

ニュー青山ビル西館17階

電話(03)475-1171/3

### オンタリオ州

東京都港区浜松町2丁目4-1

世界貿易センタービル1219

電話(03)436-4355

### ケベック州

東京都千代田区永田町

2丁目2-14

山王グランドビル501

電話(03)581-4618



八三年にはユニバシアード(国際学生スポーツ大会)、八八年には冬期オリンピック大会がアルバータ州で開催されることになっており、バンフなど名所の多い同州を訪ねる観光客は、ますます増え

う。アルバータ州は昨年、北海道と姉妹縁組みをしており、両者の中で活発な交流が続いている。

商務官 道明栄爾

## オンタリオ州

オンタリオ州政府が、日本からの産業投資、観光客を誘致し、日本との貿易を促進するため、十一年前に設置した事務所



ダグラス・ジュア  
駐日首席代表

所で、現在職員は八人。

ライセンス契約、合弁事業、ブランド建設などを通じて北米市場で事業をするのに、オンタリオ州の立地条件がきわめてすぐれていることを知ってもらおうのが主な仕事。東京事務所は、また在日カナダ大使館と緊密に協力して、オンタリオ

州の企業が製品や製造技術を日本に輸出するのを手伝う。

また幅広い観光振興活動を実施し、オンタリオへの旅についての問い合わせに応じている。

オンタリオ州はカナダ最大の食料生産地で、日本への農業・畜産輸出は年々増えている。日本におけるオンタリオ産食料品のシェアをさらに高めるための輸出市場開発活動にも、東京事務所は熱を入れて

代表 レイモンド・マッケイグ  
商務代表 大木衛

ツォリズム駐日代表 山本昭生  
ツォリズム・カウンセラール 赤羽頼子  
農業食糧省日本地区代表 竹内博

## ケベック州



M. ベルジュロン  
アジア地区総代表

東京にケベック州政府事務所がおかれ、たのは一九七三年。当初はケベック・ハウスと呼ばれ、主にケベック州と日本との

の間の通商産業関係の促進を任務として

いた。在日事務所になったのは一九七六年で、活動範囲は経済・貿易を中心に、大幅に拡大された。今では文化交流、観光案内、ケベック州についての広報などにもタッチしている。

ケベック州は天然資源に恵まれ、基盤整備も良好。ジェームズ湾に面した北部の広大な地域では大規模な水力発電開発プロジェクトが進められており、州の将来性はさらにふくらんできた。ケベック州では経済開発のため外部からの技術や資本を必要としており、この点、日本に対する期待は大きい。

ケベック州の昨年の対日貿易は、初めて黒字(五千万ドル)を記録した。州政府事務所では、対日貿易の一層の拡大に力を入れている。

スタッフは、十月二十一日に就任したばかりのマルセル・ベルジュロン州政府アジア地区総代表(前ケベック州通商産業観光省対外通商担当次官補)のほか、次の各氏。

ポール・トラハン参事官(経済担当)  
ジェラルド・コーテ参事官(農水産・食糧担当)  
ジル・ボメロ総務担当官



## カナダ研究の潮流(2)—歴史学

# 個別テーマに高まる関心

デビッド・スミス

**前**回は、カナダの政治研究の動向をご紹介した。今号ではカナダ史の最近の展開を眺めてみたい。両分野の区別は、ご承知のように時としてきわめてむつかしいのはもちろんだが。

### 東西で活発な地方史学会

**政**治研究でもそうであるが、歴史学でも地域研究の分野に非常に面白い本が出ている。今からちょうど10年前にカナダ西部史の研究者たちがカルガリー（アルバータ州）に集まり、第1回研究学会を開いた。この会議は以後、定期的に開かれて現在に至っているが、その中から何点かの興味ある本がまとめられた。その第1冊目がDavid P. Gagan編 *Prairie Perspectives* (Toronto: Holt, Rinehart and Winston, 1970)で、これはカナダ西部史をさまざまな面から検討したものである。最近の会議では、たとえば「カナダ西部と第1次世界大戦」といった個別テーマの研究が進んでいる。

**レ**ジャイナ大学（サスカチュワン州）にCanadian Plains Research Centreが開設されたのも、1970年代のはじめだった。この研究所はこれまでに数10冊の本を出版している。対象は歴史学に限らず、カナダ西部における文化人類学や社会学に及んでいるが、その中で最良の1冊にあげられるのが、同センターで最初に出したRichard Allen編 *A Region of the Mind* (Regina, Saskatchewan, 1970)。同センターは平原地方の歴史研究を主内容とする雑誌 *Prairie Forum* も発行している。

**目**を東に転じて、大西洋岸地方の研究状況を見てみよう。ここでも地域史研究が盛んで、定期的に研究学会がもたれている。地域史研究の主な発表機関は *Acadiensis* という雑誌で、この雑誌には単なる地方的粋を超えたより広い問題につながる論文が載ることが多い。大西洋岸地方史の比較的新しい本の中で特に興味あるものに Ernest Forbes 著 *The Maritime Rights Movement, 1919-27: A Study in Canadian Regionalism* (Montreal: McGill-Queen's, 1979) がある。著者のフォーブズは大西洋岸地方の不平不満の経済的原因をたどっているのだが、そこにはカナダ西部にも共通する指摘が多い。

### 労働運動史や都市問題の個別研究も

**社**会史の分野も、地方史と並んで最近注目を浴びつつある分野だ。その中でもとりわけよく取り上げられるのが労働問題と都市問題の歴史的研究である。この種の研究書では、次の2

冊が面白い。Bryan D. Palmer 著 *A Culture in Conflict: Skilled Workers and Industrial Capitalism in Hamilton, Ontario, 1860-1914* (Montreal: McGill-Queen's, 1979)、および Gregory S. Kealey 著 *Toronto Industrial Workers Respond to Industrial Capitalism, 1867-1892* (Toronto: University of Toronto Press, 1980)。そのほか、個々の都市を扱った労作がシリーズで出はじめた。いずれもイラストをふんだんに使った興味ある本だ。第1冊目は Alan Artibise 著 *Winnipeg* (Toronto: Lorimer, 1977)。雑誌 *Urban Studies Review* も都市問題をひんぱんに扱っている。

### さかんな人物史研究

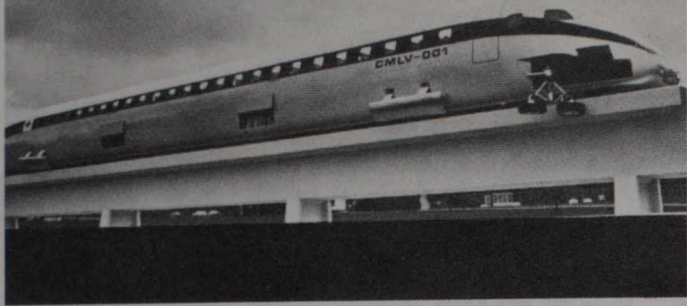
**人**物史(伝記)は、歴史研究の中で常に人気のある分野だ。とくにカナダ史が生んだ驚異的人物マッケンジー・キングについての研究が、相変わらず盛んである。私生活の面からキングを研究した C. P. Stacey 著 *A Very Double Life: The Private World of Mackenzie King* (Toronto: Macmillan, 1976)、あるいは彼の公私両面の関連を扱った Joy Esbrey 著 *Knight of the Holy Spirit: A Study of W. L. Mackenzie King* (Toronto: University of Toronto Press, 1980) などが出ている。そのほか都市レベルの政治家も最近の研究で取り上げられており、一例をあげると Tim Colton 著 *Big Daddy: Frederick G. Gardiner and the Building of Metropolitan Toronto* (Toronto: University of Toronto Press, 1980)、あるいは Brian McKenna と Susan Purcell がモントリオールの政治家ドラポーについて共同で書いた本 *Drapeau* (Toronto: Clarke, Irwin, 1980) などがある。人物史では政治家のほかに、長年にわたってカナダ国鉄の経営にあたったドナルド・ゴードンや、少し時代はさかのぼるがジョセフ・フラベルといった大実業家の研究も進んでいる。Joseph Schull 著 *The Great Scot: A Biography of Donald Gordon* (Montreal: McGill-Queen's, 1979)、Michael Bliss 著 *A Canadian Millionaire: The Life and Business Times of Sir Joseph Flavelle, bart, 1859-1939* (Toronto: Macmillan, 1978)。

**以**上にあげた本は、最近の研究成果のほんの1例にすぎない。選択分野も地方政治史および全国政治史に限った。研究対象も20世紀を中心とした。限られた紙面および私の関心からそうならざるをえなかったことをお許しいただきたい。  
(カナダ講座担当客員教授)

# カナダ人の 発明発見 (XIII)

## ● リニア・モーター・カー

モントリオールにある連邦政府の輸送開発センターでは、一九七一年以来、磁気浮上車（マグレブ MAGLEV）と都市間輸送におけるその可能性について研究しているが、最近の見通しによると、この技術を利用した高速列車（HST 写真）がカナダでも今世紀中には実現しそうだという。



国立科学研究所で開発したマグレブは、翼と足、エンジンを取り去ったDC-9機に似ており、高架の軌道の上を最高時速四五〇キロで走る。

オンタリオ州キングストンのクイーンズ大学にあるカナダ誘導地表輸送研究所では、トロント、オタワ、ミラベル（国際空港）、モントリオールをマグレブで結ぶ場合の経済的可能性を検討した結果、高架軌道の建設にはおよそ三十億ドルかかるが、それでもじゅうぶん採算はとれるし、航空輸送よりも

安くつく、との結論をだしている。

ミラベル空港からモントリオール、アルバニー（米ニューヨーク州）をへて、ニューヨーク市までのマグレブ運行も検討されている。これが実現すると、モントリオール市内からニューヨーク市内まで二時間以内で行けることになり、所要時間が飛行機より大幅に短縮されるだけでなく、とても便利になる。

## ● サブ・イグルー

イグルーといえば、かつてエスキモーが住んでいた氷の家だが、これはアクリル製の半球を合わせて作った海底の家。

一九六九年にカナダの医師でダイバーでもあるジョセフ・マッキニスが開発したこのサブ・イグルーは、四方八方が見渡せるだけでなく、海水でもサビつかない。内圧が外部の水圧と等しくなるように空気を送り込むと、地上における探検者のテントと同じく、ダイバーたちの休息および行動拠点となる。

サブ・イグルーは、一九七二年十一月、北極圏から六百キロ北にあるレゾルト近海で強度や、住み心地がテストされた。極地の水海下に人間の乗った「基地」が設置されたのは、これが初めてである。実験は成功し、ダイバーたちは七、八時間も北極海の底で活動することができた。

## ● カナダ式ボウリング

日本ではボウリングのピンの数は十本、

というのが常識だが、カナダでは五本が普通。

ファイブ・ピン・ボウリングは、カナダで生まれ、カナダで育ったゲームだ。

話は一九〇四年にさかのぼる。ホテル、劇場、競馬など、幅広く事業を手がけていたトロントのトミー・ライアンは、その年、ボウリング場を開設した。金持ちの事業家たちがだんだん集まるようになってきたが、思わぬ問題が待ち構えていた。まず、その頃の昼食時間は三十分が普通だったため、テン・ピンのゲームでは長くかかりすぎた。それに十六ポンドもするボールを持ち運びするのは、いかにも不便。

そこでライアンはもっと簡単にできるボウリングを思いついた。ボールの重さをわずか三・五ポンド（約一・五キロ）にして、お客が持ち運ばなくてもすむように、ボウリング場にいくつも用意したのである。もちろん、ピンも小さくした。そしてピンが飛びはねないように、ライアンはピンの中央部にゴム輪をはめた。

テン・ピンのボウリングと比べて時間が短縮され、あまり力もいらなくなったため、それからは女性の愛好者もふえた。そしてボウリング場がトロントのあちこちにできた。

現在、ボウリング人口はカナダの参加スポーツの中で一番大きい。リーグ戦に参加する競技人口はおよそ八十九万人で、そのうち六十万人はファイブ・ピン・ボウラーだ。

## 編集後記

○大使館——というところ、何か近づきたいイメージがあるようです。どういった担当があつて、それぞれどういう仕事をしているのか、知らない人も少なくありません。

○スペースの制約もあつて、はたしてカナダ大使館のスタッフやそれぞれの仕事をきちんとご紹介できたかどうか、あまり自信はありません。当大使館を利用する上で、またさまざまな分野における日加間の結びつきを理解する上でお役に立てば幸いです。

○カナダの憲法問題（トピックス欄参照）に解決のメドがつかしました。本号がお手元に届く頃には、自主憲法制定へ向けてさらに進展していることと思います。カナダはこれで新しい時代を迎えることになりました。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100東京都港区赤坂七丁目三三三八

カナダ大使館広報部